

## 楽しさの創造へ

鈴木 忠 義

## つぎの時代 生産文化から生活文化へ

つぎという言葉には、なにかこれまでの経緯に対し、変化とか順位とか飛躍を感じさせられる。そして技術革新の渦中にある。今日においてのつぎの時代は、大きな飛躍を連想せざるを得ないものがある。筆者はその大いなる飛躍を、生産文化から生活文化への移行としてとらえたい。すなわち、人類の生成以来、人には生活必需物資の発掘と生産に終止し、その貧困なるがゆえに相互の生命をも賭して戦ってきたのである。しかし、今日のわが国はこの貧困からようやく脱皮し、中進国へ、さらに先進国への道を歩まんとして努力がつけられている。そして多くの科学技術に支えられ、生産性の向上はいちじるしく、物資の生産以上に何をつくり出すことが国民の幸福になるかという、生活文化の向上が重要視される兆を示してきた。その完全な実現の時代をつぎの時代としたい。それは人類の生活手段としての生産から、人類の生活目的への移行としてもとらえることができる。

## 生活目的としての観光

生活目的は、いろいろの拘束をとまなう労働からの開放であり、その開放された時間的、空間的、経済的消費の活用により、生理的、精神的な発展をうることである。そして、われわれは1日を周期とし、また、1週間を、1月を……さらに一生というライフ サイクルによって、生活を営みつつけている。その中において、リクリエーションはその本質から生産文化からの開放により、いちじるしく国民の生活目的となるにいたった。そして、リクリエーションの一分野とし、さらに高い文化性をもった観光は、今日においてすらその過渡的なそして偏心した型ではあるけれども、国民の生活現象として重要性を持つにいたったのである。そしてここでは観光

の定義や本質論をのべるつもりはない。ただ単純な現象としての観光において、一部にはその行動の非がとがめられながらも、多くの人々はリクリエーションとして、また、自らの情操の糧として観光旅行の喜びを享受しているのである。

## 観光と土木

土木技術はつぎの時代をまつまでもなく、完全にヒューマンスケールを越え、次代においてはさらに規模と速度においてその発達に期待されることは当然である。そしてその発達した技術が、人類の生活目的につながる観光施設や開発に登場してくることとなる。

この土木技術の観光への登場は、極言していうならば自然開発の限界と土木技術の可能性の限界との両極端としてあらわれてこよう。

前者はいかに土木技術が発達しようとも、その闖入をゆるすことのできない自然保護と、ヒューマンスケールの開発の尊重を重視する地域の必要性である。しばしばわが国の風景は箱庭式といわれる。しかし、それはヒューマンスケールの観光利用にとっては、世界にも誇りうる価値をもっているのである。そのような地域に対し、安易なマシンスケールの観光開発を持込むことはその開発とともにその真価がうしなわれ、その投資自体も価値を失うこととなるのである。その地域をヒューマンスケールのまま観光するための経済的、時間的な基盤はすべての国民が獲得しているはずであり、それがつぎの時代なのである。

後者については、遊園地や博覧会場、再開発の必要にせまられている観光集落などに、その典型があらわれる。観光旅行には日常生活とのコントラストが要求される。それは人工対自然、狭き対広きなどその数はかぎらない。そして、観光客の経済的均衡の欠除により、より高い料金の負担により、観光施設として新しい技術の実現が可能となる。すなわち、モノレールが遊園地施設や博覧会場にはじめて登場してきているごときは、その一例であり、多くの試作品が高度の観光消費に支えられ、斬新な姿をあらわすことは、海中公園として、遊園地開発として見られることであろう。要は土木技術の夢の世界が、観光施設や開発のなかにこれまでに育ち規模と速度と着想により実現されてゆくのである。

(筆者・正会員 東京大学助教授)

## ■ 挿画について ■

本欄には初めての試みとして挿画を入れてみました。お書きいただきました方は下記のお二人です。[編集部]

Y. YASO 八十島義之助氏(会誌編集委員会委員長・東京大学)

ASA 浅谷陽二氏(会誌編集委員・日本住宅公団)